

(7) 遺伝性がんの遺伝子診断に対する大学生の意識調査

川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科医療福祉学専攻修士課程 ○藤田 裕子
川崎医療福祉大学医療福祉学部医療福祉学科 山内 泰子, 井上 信次, 升野 光雄

【背景】 遺伝性がんの遺伝子診断では倫理的・心理社会的問題が生じる可能性があり、遺伝カウンセリングによる支援が重要となる。

【目的】 遺伝性がんの遺伝子診断に対する大学生の意識を明らかにする。

【対象および方法】 A 大学に在籍し1年次必修科目を履修している学生を対象に集合調査を行った。無記名自記式質問票調査である。質問項目は「属性」「遺伝性がんと遺伝子診断に対する認識」「遺伝子診断のベネフィットとリスク」「遺伝子診断後の対処とサポート」「遺伝子診断の結果の伝達」に関する計47問である。

【結果】 配布数597部、回収数536部であり、同意欄に記載がない回答および1年生以外の回答を除いた526部（88.1%）を解析した。年齢は平均18.3歳、性別は男性32.8%、女性67.2%であった。血縁者にがん罹患者がいる割合は48.0%であった。遺伝性がんと遺伝子診断に対する認識の割合では「遺伝性がん

んという言葉聞いたことがある」85.5%、「遺伝子診断という言葉聞いたことがある」86.3%であった。「遺伝性がんの遺伝子診断に賛成」は97.9%、「遺伝性がんの疑いがあるとき遺伝子診断を希望する」は88.7%であった。遺伝子診断のベネフィットとリスクについては「自分のがんの危険性がわかる」94.3%、「社会生活上差別を受ける」23.5%であった。遺伝子診断後に行いたい対処については、「外科的予防」56.7%、「化学的予防」52.9%、「定期検診」91.0%であった。遺伝子診断の結果を家族・血縁者に話すことに、78.8%が賛成と答えた。

【考察】 今回の調査集団では、遺伝子診断に賛成である割合より、遺伝性がんの疑いがあった場合、遺伝子診断を希望する割合の方が低い。また、がんの易罹患者があると診断された場合、外科的予防および化学的予防より、定期検診を希望する割合のほ